

V 遺 物

遺物の大部分は土器で、ほかに瓦埴類、金属製品、石製品が少量出土した。時代別でみると弥生時代から近世までの遺物があるが、中世の遺物がその大半を占めている。以下、土器、瓦埴類、金属製品、石製品の順に、遺構ごとにまとめて記すことにする。

1. 土 器

A S D140 出土の土器（第12図）

溝の堆積層である暗灰色粘土層と灰黄褐色土層から弥生式土器、7世紀末（藤原京時代）の土師器・須恵器、中世の瓦器が出土した。瓦器は上層の灰黄褐色土層の上半に限って出土した。弥生式土器、土師器・須恵器は両層に混在しており、量的には7世紀末のものが多数を占める。

a 弥生式土器 壺・甕・鉢の小片が数点ある。いずれも著しく磨滅しているが、畿内第V様式に属するものである。

b 7世紀末の土師器・須恵器（第12図）

土師器には杯AⅡ，皿A，皿C，蓋，高杯，盤A，鉢B，甕がある。

杯AⅡ（2）は平底と外にひらく口縁部からなり、口縁端部は内側に丸く巻き込む。b₁手法⁽¹⁾で調整し、内面は横撫での上に螺旋暗文+2段放射暗文を施す。橙色を呈し、口径15cm、高さ4.2cmを測る。

皿Aは広い平らな底部と短かくひらく口縁部からなり口縁端部は巻き込む。磨滅した小片のため口径および調整手法、暗文は不明である。

皿Cはe手法で調整した小型の皿で、口径10.4cm・高さ1.5cmを測り、口縁端部は巻き込まずに外反する。口縁部外面を強く横撫でするため、底部との境には稜を残す。褐色を呈し、胎土に多くの細砂を含む。

蓋（1）はわずかに凹む頂部と折りかえした縁部からなり、頂部には円盤形のつまみをつける。頂部は篋削り、その他は横撫でで調整する。さらに外面では、つまみを中心に井桁状の篋磨きを頂部と縁部に施している。内面の暗文は磨滅のため不明である。橙色を呈し、口径20cmを測る。全体に厚手に作られている。

高杯は杯部と脚部の接合部分である。脚は縦に篋削りしており、断面が9角形をなす。杯部の内面には螺旋暗文、外面には篋磨きを施す。

盤A（8）は平底と斜めにひらく口縁部からなる大型の土器で、口径48.6cmを測る。底部外面と口縁部は横方向に篋削りし、口縁部上方に三角形の取手を一対はりつける。内面には螺旋

暗文・2段放射暗文および結節部をループに巻いた連弧暗文をつけ、口縁部外面には横方向の篋磨きを施す。

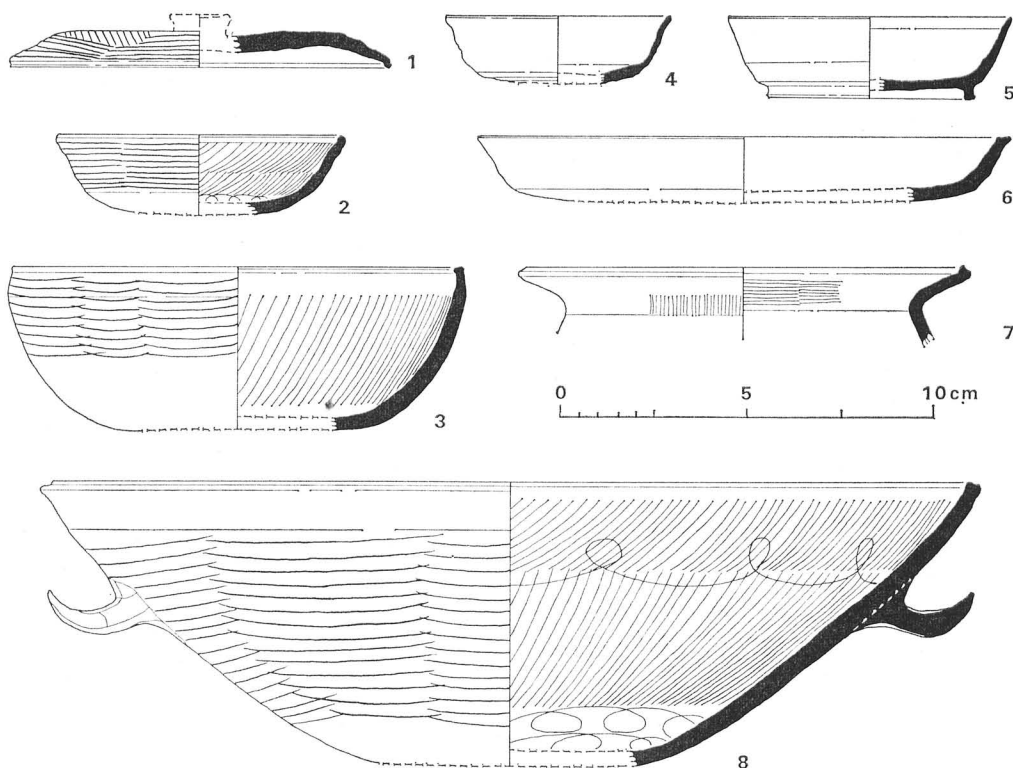
鉢B(3)は平底とわずかに内彎する口縁部からなり、口縁端部を内側に巻き込む。口縁部内外面および内面を横撫でで調整した後、1段放射暗文をめぐらす。外面は口縁部下半以下を横方向に篋削りした後、口縁部上半には篋磨きを施す。

甕(7)は口縁部が外反し、端部は上部に丸く巻込む。口縁部は内面を横方向の刷毛目、外面を縦方向の刷毛目で整形した後、内外面を横撫でで調整する。黄褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含むろい土器である。このほかに口径13cmの小型の甕で、体部上半の内外面に刷毛目を施すものや把手が出土した。

須恵器には杯A、杯B、皿、高杯、壺A、壺・瓶類、鉢、甕がある。

杯A(4)は平底と外方にひらく口縁部からなる。底部外面に篋切り痕をとどめ、そのまま口縁部内外面をロクロ撫でにより仕上げる。青灰色。

杯B(5)は杯Aに高台をはりつけたもので、口径は17.7cm、16.5cm、14.8cm(5)のものがある。5は底部外面に篋切り痕を残し、高さ0.5cmの高台を底部外周につける。青灰色を呈



第12図 S D140出土土器

し胎土に砂粒を含む。平城宮出土の第Ⅰ群土器⁽²⁾である。このほかに青灰色をし、堅く緻密な胎土に黒色物質を含む平城宮の第Ⅱ群土器に相当するものがある。底部外面をロクロ削りし、底と口縁部の境に外面で稜をつけるもので、高台は外端部が内端部よりも0.2cm高くなり、幅1.4cmを測る。

皿(6)は大きな平底と短かく外方にのびる口縁部からなり、口縁端に平坦面をつくる。底部外面を丁寧にロクロ削りし、口縁部内外面はロクロ撫でで仕上げる。白灰色を呈し、胎土は軟質で砂粒を含まない。口径28cm、高さ3.6cmを測る。

このほかの器種はいずれも小片で、壺Aの口縁部、高杯の脚部、壺・瓶類の胴部、鉢、甕の口縁部、胴部片がある。

土器以外の土製品では現長5cmを測る土馬の足1点が出土した。土師質のもので磨滅が著しく、細かな特徴は明らかでない。

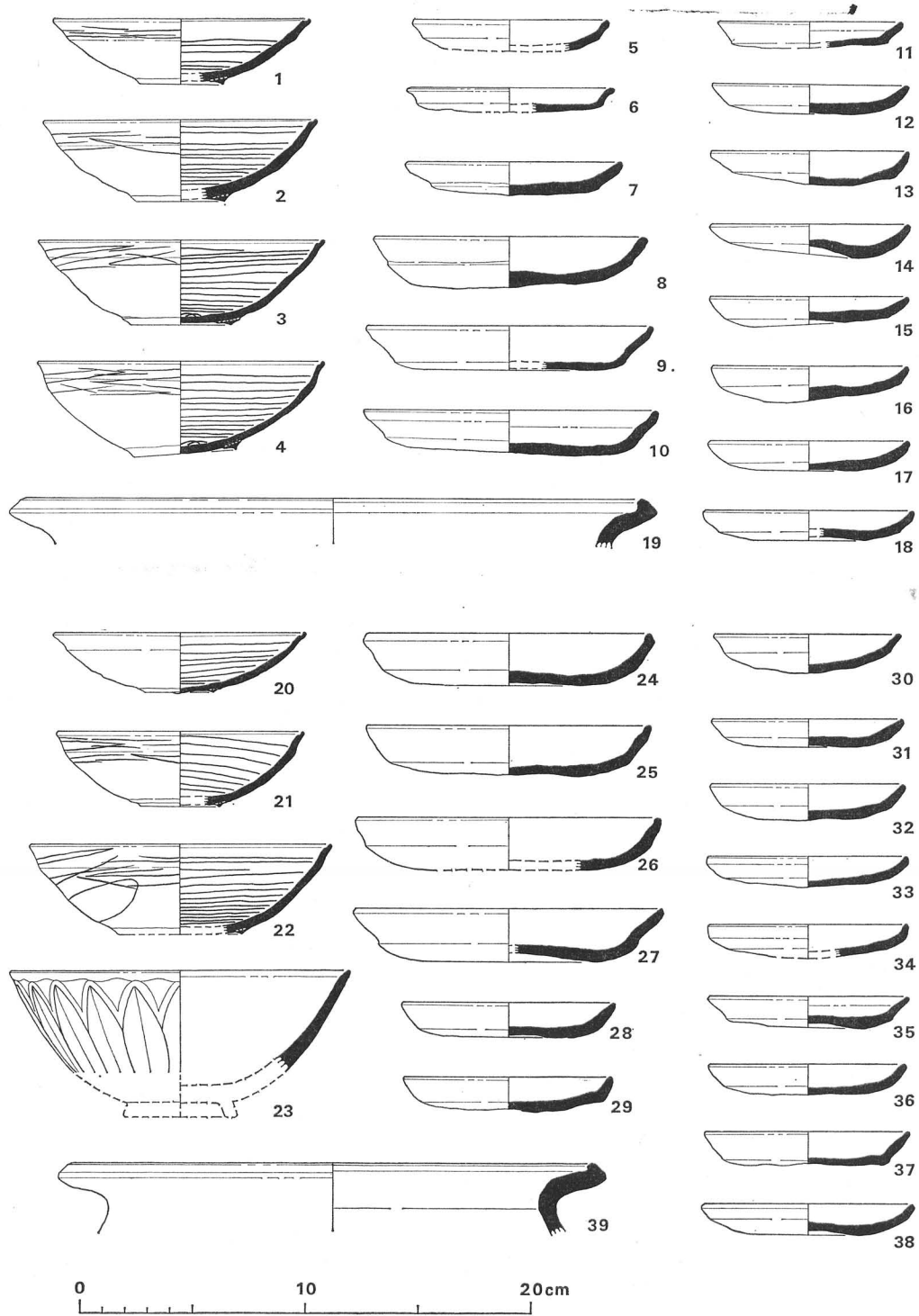
B 堅穴住居跡S B105・110・115出土の土器(第13図)

3棟の堅穴住居跡S B105・110・115にはそれぞれ土壌SK103・107・108が伴っている。堅穴住居跡と土壌はそれぞれ同時期とみなしうるので両者から出土した土器を一括して記述する。土壌を含めた3棟の住居跡出土の土器は型式的に大差ないので、S B105・SK103出土土器の細部について具体的に述べる。なお、堅穴住居跡出土土器の個体数は第1表にあげた。

S B105・SK103出土の土器(第13図1～19) 瓦器碗・皿、土師器皿・土釜がある。

瓦器碗(1～4)は不安定な高台をはりつけた底部と外にひらく口縁部からなるいびつな土器で、一条の凹線を口縁端部内面にめぐらし、口縁端部を薄くおさめる。口径12～12.6cm・高さ3.6～4.1cmのもの(2～4)と口径11.2cm・高さ2.8cmのもの(1)がある。口縁部内外面に横撫で、底部内面に乱撫でを施す。外面は底部から口縁部下半にかけて指の圧痕を残し凹凸が著しい。内外面に篋磨きを施すものが一般的であり、外面は口縁部下を幅1cm前後にわたって折りがえしながら横方向に粗く磨く。内面は3・4のように底部に2～3回回転させた螺旋線暗文を施し、それ以外を渦巻状に粗く磨く。高台は直径4.5cm前後、高さ0.2cm前後を測るが、いずれも不整円形で、断面形は三角形をなす。高台が低いので、4のように高台が底部よりも上位にあってその用をなさないものや高台の剥離したものが多い。内外面は灰黒色を呈するものが一般的であるが、なかには重ね焼きによってできたと推定される燻しのかからない乳白色の部分の口縁部内外面に残すもの(1)もある。器壁は薄く0.4cm前後である。粘土は水漉ししたものを使用し、胎土は緻密で堅く焼かれ、淡灰色を呈する。径高指数は30前後である。これらの碗は白石太一郎氏による編年⁽³⁾の第7型式に相当すると考えられるが、外面に篋磨きを施す点は異なっている。

瓦器皿(5・6)は平底と短かくのびる口縁部からなる。口縁部は5のように丸くおさめるものと、6のように外反して上面に平坦面をもつものがある。法量は口径8.6～8.8cm・高さ1.1～1.4cmを測り、後述する土師器皿AⅡに相当する。色調・胎土・焼成は碗と大差がない。



第13图 SB105·SK103, SB110·SK107出土土器

口縁部内外面を横撫でにし、底部外面は不調整で凹凸が著しい。腕にみられた内外面の磨きおよび底部内面の暗文は明らかでない。

土師器皿（7～18） 平底と短かく外方にのびる口縁部からなる。口縁部内外面を横撫でし底部外面は不調整で、指の圧痕をそのまま残すものが多い。法量からみてAⅠ，AⅡの二種に分類できる。

皿AⅠ（8～10）は口径11.8～12.8cm・高さ2.1～2.3cmを測る。口縁部外面を強く横撫でするために、底部との境に明瞭な稜をつけるものが多い。8・10は淡赤褐色，9は灰褐色を呈し、いずれも胎土に多くの砂粒を含む。

皿AⅡ（7・11～18）は口径8.0～10.3cm・高さ1.0～1.6cmを測る。底部との境に稜を持つものには7・11・13・18がある。また、7・11のように口縁部が直線的にのびるものと14のように内彎気味のものがある。色調は7・11・12・17が赤褐色，13・14が淡灰黄褐色，15・16・18が淡灰褐色ないし淡褐色を呈する。赤褐色のものは口縁部が直線的にのび胎土に砂粒を多く含んでおり、淡黄灰褐色のものは胎土が緻密で含まれる砂粒も少ない傾向にある。

土釜（19）は球形の胴部の上半に鐏をつける煮沸用の土器である。口縁部のみ出土した。外反する口縁部の端部を内折したもので、口径27.0cmを測る。胎土に多くの砂粒を含み褐色を呈する。稻垣晋也氏による分類のA型式に相当すると考えられる。

S B 110・S K 107出土の土器（第13図⁽⁴⁾20～39）

瓦器の腕・皿，土師器の皿・土釜，磁器がある。

瓦器腕（20～22）は口径11cm前後・高さ2.6～3.4cmの小型のもの（20・21）と口径13.2cm・高さ4.0cmの大型のもの（22）がある。20は口径に比して高さの低い土器で、磨滅のため外面の磨きは不明である。22は他のものと比較して外面を幅広く磨いている。底部を欠くものが多いため内面の暗文は不明である。20を除き径高指数30前後。

瓦器皿（30）は口縁端部を丸くおさめるもので、口径8.0cm，高さ1.8cmを測る。篋磨き，暗文は明らかでない。

土師器皿（24～29，31～38） 皿AⅠ（24～27）は口径12.3～13.5cm・高さ2.2～2.4cmを測

	S B 105	S K 103	小計	S B 110	S K 107	小計	S B 115	S K 108	小計
瓦 器 腕	7	5	12	2	6	8	6	1	7
〃 皿	5	0	5	0	1	1	1	0	1
土師器皿AⅠ	1	3	4	0	4	4	1	0	1
〃 皿AⅡ	3	14	17	3	17	20	6	1	7
土 釜	1	1	2	1	1	2	3	0	3
そ の 他				磁器腕 1		1			
計	17	23	40	7	29	36	17	2	19

第1表 竪穴住居跡出土土器の個体数

る。24~25は口縁部が内彎気味にのび、端部はわずかに肥厚する。27は底部との境に稜をもち口縁部は直線的にのびる。24は淡灰黄褐色、25・26は灰褐色、27は淡赤褐色を呈する。

土師器皿AⅡ（28・29・31~38）は口径8.5~9.6cm・高さ1.2~1.6cmを測る。35・37は稜をもち、口縁部が直接的にのびる。29は口縁部2カ所に煤が付着し、灯明皿としての使用が確認される唯一の例である。31・33・37は淡赤褐色、28・32・35・38は灰褐色、29・34・36は淡灰黄褐色を呈する。

土釜（39）はA型式に属し、SK103出土のものと大差ない。口縁部内外面は横撫でで調整し、頸部外面には煤が付着する。口径23.1cmを測り、褐色を呈する。

磁器碗（23）は外面を蓮弁文で飾り、内外面にくすんだオリーブ色の釉を施す。胎土は緻密で白灰色をなし、釉は厚い部分で0.5mmを測る。中国の竜泉窯系の製品であろう。

S B115・SK108出土の土器（第14図）

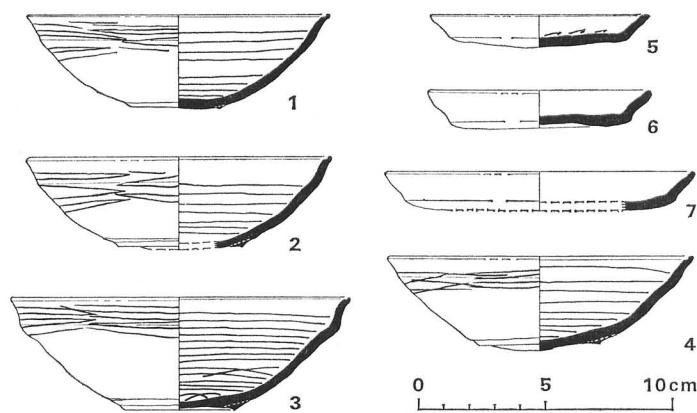
瓦器碗・皿、土師器皿・土釜、須恵質の甕または鉢がある。

瓦器碗（1~4）は口径11.8cm・高さ3.5~3.7cmのもの（1・2・4）と口径13.2cm・高さ4.5cmのもの（3）がある。1は内外面に燻しがかからず全体が乳白色を呈する。2、4の外面は燻しのかからない乳白色の部分が残る。4の内面の筥磨きは特に粗く、底部には螺旋暗文を施さない。3は底部内面に粗い螺旋暗文を施したもので、底部から斜め上方にのびる口縁部は上半で直立しながらわずかに外反する。

瓦器皿（5）は口径8.5cm・高さ1.2cmを測る。口縁部は外反し、底部内面にジグザグ状の暗文を施す。

土師器皿（6・7） 皿AⅠ・AⅡがある。いずれも口縁部と底部との境に稜をつけるもので、皿AⅠ（7）は褐色を呈し、口径11.8cm・高さ1.5cm、皿AⅡ（6）は淡赤褐色を呈し、口径8.6cm・高さ1.5cmを測る。

土釜は口縁部小片3個体分がある。いずれもA型式に属するものである。



第14図 S B115・SK108出土土器

このほかに須恵質の甕または鉢の体部片が出土した。小片のため全形を知ることにはできないが、貯蔵用の甕あるいは調理用の鉢になるものと思われる。

C SK124出土の土器

弥生式土器がある。磨滅が著しいが、畿内第Ⅴ様式に属する高杯・壺・甕の破片が各一個体分がある。

D SK121出土の土器

須恵器1点がある。青灰色を呈する無蓋高杯の杯部片である。時期的には陶邑MT15窯出土のもの（6世紀前半）に近い。

E SB120出土の土器

各柱掘り方から土師器・須恵器の細片が出土した。西妻柱の掘形からは土師器の皿・蓋が出土しており、奈良時代のものと思われる。

F SK145出土の土器（第15図1～7）

瓦器碗5，土師器皿AⅡ5，土釜1，陶器片1がある。

瓦器碗（1・2）は口径13.9～15.2cm・高さ5.2cmを測り，口縁部は内彎気味に上方にひらく。堅穴住居跡出土のものに比較して器壁を厚く作る。底部内面には比較的整った螺旋暗文を施し，口縁部内面の磨きも密である。外面は幅2～3cmにわたって横方向でジグザグ状に磨く。高台は断面三角形を呈するはりつけ高台であるが，幅広く安定している。径高指数は36前後を示す。白石氏編年の第5型式に相当するものであろう。

土師器皿AⅡ（3～6）は口径9.0～9.9cm・高さ1.2～1.7cmを測る。3・6は淡赤褐色，4は灰褐色，5は淡黄灰褐色を呈する。

土釜（7） A型式のもので口縁端部を大きく巻き込む。口径26.8cmを測り，褐色を呈す。

陶器片は内外面に黒釉を施したもので，胎土は乳白色を呈する。

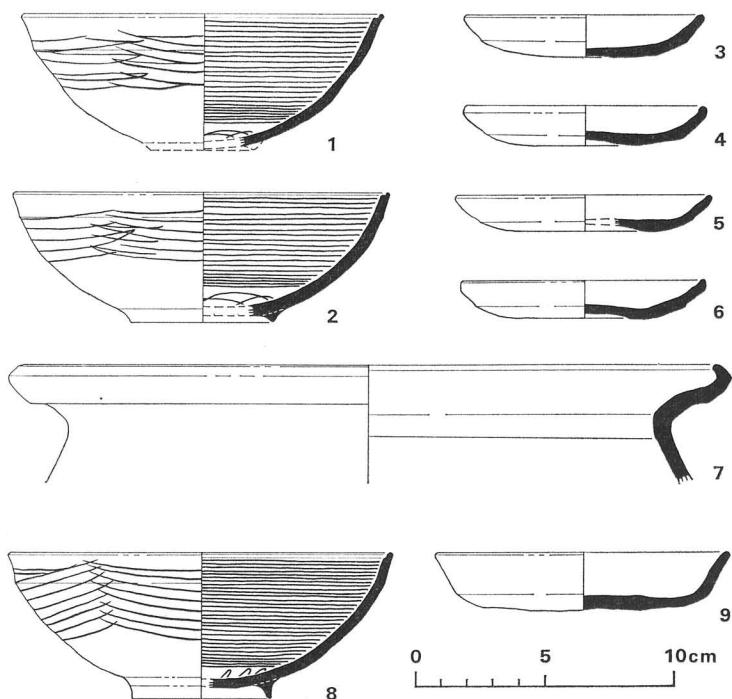
G SK125出土の土器

瓦器碗2点が出土した。

口径13.4cm，高さ4.5cm前後のもので，底部内面には螺旋暗文を施す。内面の磨きは堅穴住居跡出土のものより密で，SK145のものより粗い。白石氏編年の第6型式に相当するものと思われる。

H 整地層出土の土器（第15図8・9）

T1・T2区の整地層は瓦器，染付茶碗などを含んでいる。それらのうち比較的保存状態の良い瓦器碗，土師器皿を图示

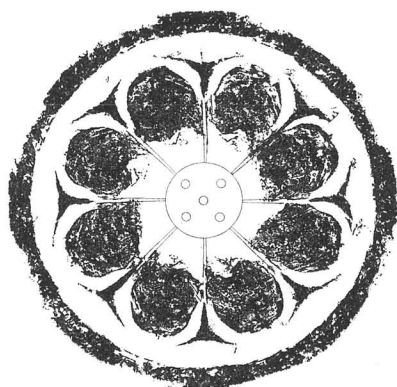


第15図 SK145その他出土土器

することにする。

瓦器碗(8)は口径14.7cm・高さ5.7cm・高台の高さ0.5cmを測る。外面を幅広く磨き、底部内面にはジグザグ状の暗文を施し、底部から口縁部にかけて横方向で密に磨く。胎土はやや黄味をおびた淡灰色を呈する。白石氏編年の第3型式に相当するものであろう。

土師器皿(9)は口径11.1cm・高さ2.3cmを測り、口径に比して、深さの深い土器である。口縁部内外面を横撫でし、底部外面は凹凸が著しい。

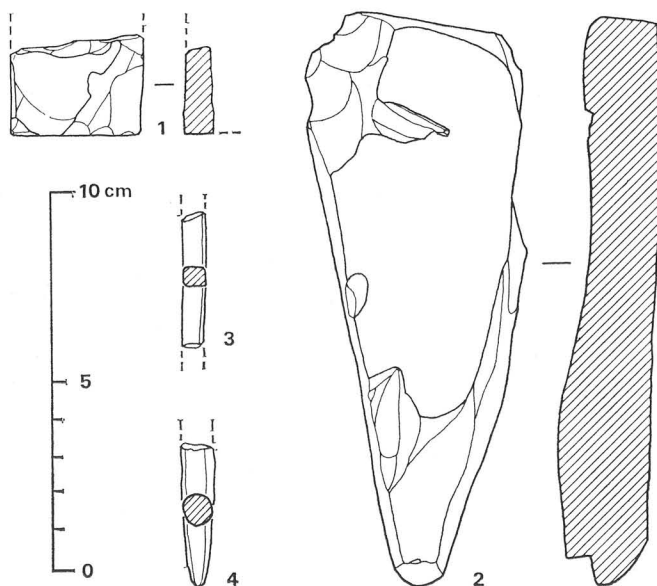


第16図 SD140出土軒丸瓦(1/4)

2. 瓦 塼 類

瓦 古代から近世に及ぶものが少量ずつ出土した。軒丸瓦は2点あり、いずれもSD140から出土した。第16図は外縁を素文とする単弁蓮華文軒丸瓦で、弁端の形状は軽寺跡出土のものに類似している。7世紀後半のもの。他の1点は中房に一重の蓮子をめぐらす複弁蓮華文軒丸瓦で、磨滅が著しい。8世紀のものである。

塼 SB115の東北隅から火を受けたもの1点が出土した。四辺を欠失しており、厚さ5.1cmを測る。中世の住居に転用されたものであろう。



第17図 鉄製品・石製品実測図

3. 金属製品・石製品

金属製品は鉄釘1(第17図3)棒状の鉄製品1(4)が出土した。いずれも鍛造品である。鉄釘は両端を欠失する。断面形は四辺形をなし、一辺0.5cmを測る。T2区の整地層から出土した。棒状の鉄製品は一端を欠失しているが、他方は丸くすばめている。現長3.8cm, 断面形は円形をなし、最大直径0.9cmを測る。SB115の埋土出土。

このほか、鉄滓3点が出土した。鍛冶滓と思われる。1点はSB120の柱掘り方から出土し

た。奈良時代のもの。他の2点は瓦器に伴ってSD123およびT2区の整地層から出土した。今回の調査では鍛冶関係の遺構を検出していないが、T1区のSK145からはフィゴの羽口小片も出土している。近くに中世の鍛冶に関連する遺構の存在が推定される。

石製品には砥石2点がある。1は幅4.5cmのもので小口部は砥石製作時の整形面を残す。上面と側面を使用している。下面は剥離しており、現存長0.8cmを測る。乳灰色を呈し、泥岩製。SD140灰黄褐土出土。2は長さ15.2cm・最大幅5.5cm・厚さ2cmの自然石を利用したものである。すわりを良くするために下面を打割り平らにしている。上面は使用され、すり減っている。黝黒色を呈し、粘版岩製と思われる。近世の遺物を含むSK128から出土。

註

1. b₁手法は口縁部内外面を横撫でしたのち、口縁部外面を篋磨きし、底部を篋削りしたものである。またe手法は口縁部上半のみを横撫でし、底部に成形時の凹凸をそのままとどめながらも木葉の痕跡がみられないものである。
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』（奈文研学報23冊）1975年。
2. 平城宮跡から出土する須恵器は形態、製作技法、色調、胎土の特徴によって3群にわけられている。それらのうち色調の特徴だけを記すと第Ⅰ群土器は青灰色、第Ⅱ群土器は淡青白色、第Ⅲ群土器は灰白色を示すものである。各群は生産地を異にするものと想定される。
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅵ』（奈文研学報23冊）1975年。
3. 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二、三の問題—古代末～中世初頭における土器の生産と流通に関する一考察—」『古代学研究』第54号 1969年。
4. 稲垣晋也「法隆寺出土資料による土釜の編年」『大和文化研究』第7巻7号 1962年。



第18図 建設中の畝傍東小学校